

部先生はパソコンで原稿やメールを書かれ、病床からも亡くなる直前までメールをいただきました。先生からはいつも簡潔ながらも丁寧なお返事をすぐにいただき、筆不精の私にとっては、正にお手本のような先生でした。服部文男先生が亡くなられた後、先生の御遺稿を調べるために、パソコンを見せていただきました。予想通りフォルダにきちんと整理されていました。先生はお亡くなりになるまで飽くなき探究心をお持ちで、それも史料・文献を丹念にお調べになり、お話しくださる方でした。ちょうど先生の肺がんが見つかった2005年頃だと思いますが、世界中の『共産党宣言』の刊本の表紙を集めるというプロジェクトをやっておりました。服部先生にもお願いして、『共産党宣言』をめぐるいろいろな思い出などをお話しいただきました。その時も、先生は私たちのためにきちんと原稿をご用意しておられたことを思い出します。最後に先生とよくお話ししていたテーマに「(神の)見えざる手」のメタファーの歴史があります。アダム・スミスの言葉として有名ですが、先生亡き後、私に残された研究テーマとなりました。

二つの服部文庫

大 村 泉（東北大学大学院経済学研究科教授）

服部文男先生が長逝されてから、もうすぐまる5年になる。本年（2012年）10月13日、尚絅学院大学で「服部英太郎・文男遺文庫」開設のシンポジウムが開催され、いよいよ両先生の遺文庫が一般公開されることになった。この場をお借りし、改めて、遺文庫の開設にご尽力頂いた、佐々木公明学長、上西義昭常務理事（当時）、図書館長阿留多伎真人教授（当時）、そして目録作成等、実務作業に尽力された図書館職員諸氏に、心より感謝の意を表する。

本年初に、佐々木学長から、シンポジウムの開催に協力を要請され、パネリストの選任や日程調整に関わった。私もパネリストに加わるようになっていたが、今年は、家族の大病・入院が相次ぎ、私自身も3月末に痛めた椎間板ヘルニアが半年経っても治癒せず、9月に東北労災病院で手術することになり、パネリストはむろん聴衆としてシンポジウムに出席することもできなかった。シンポジウム後、佐々木学長から、記念誌に寄稿依頼を受けたので本遺文庫の開設経緯について述べようと思う。タイトルを「二つの服部文庫」としたのは、この機会に、尚絅学院大学図書館には収蔵されず、清華大学図書館（中国・北京）に収蔵されることになった文男先生の遺文庫も紹介しようと考えたからである。

2007年12月30日に服部文男先生が亡くなられた。先生の訃報を受けたのは、ご遺族の間で葬儀が済んだ翌年初めではなかったかと記憶する。弔問した際、ご遺族から、文男先生の遺文庫の処理を、私と黒滝正昭氏（宮城学院女子大学名誉教授）、大和田寛氏（仙台大学教授）を中心に門下生があたることを要請された。その後、ご遺族の希望は、これらの遺文庫を散逸させずまとまった形で保管することにあることが確認されたので、なるべくこのご希望に沿うような受け入れ先を見出そうと云うことが門下生の間で申し合わされた。他方、遺文庫をサンプリングし、暫定目録を作成しておかないと、話を具体的に進めることは困難であった。そこで、2008年夏から翌春にかけて、両先生の遺文庫の内、5000冊余の暫定目録を作成すること

になった。目録に含めた書籍の一部は文男先生の旧蔵書だが、多くはISBNを用いた簡易入力が不可能な、英太郎先生が蒐集された刊行時期の比較的古い書籍であった。書籍の選択は黒滝氏と大和田氏の協力を得て行い、暫定目録作成の実務作業は、私の研究室に所属する博士研究員、大学院学生の久保誠二郎氏、小野良寛氏、玉岡敦氏に依頼した。

文男先生が亡くなられて1年ほどが過ぎ、2009年になって、目録の作成は順調に進んでいたが、受け入れ先の見通しは不分明なままであった。こうしたときに、共同研究を数多く手がけている窪俊一氏（情報科学研究科准教授）の、「尚綱学院大学が新しい図書館を建設中だが、佐々木学長は情報科学研究科を退職された後、尚綱に学長として移られているので紹介できる、一度打診してみてもどうか」、という提案は干天慈雨であった。早速、窪氏の紹介を得て、佐々木学長に上記の暫定目録と共に推薦書をお送りしたところ、前向きのご返答を得ることができた。ほぼ同時に、暫定目録は、ロルフ・ヘッカー氏（ベルリン・MEGA編集促進協会理事長、ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー教授）にも送られていた。同氏は、私の友人で、新MEGA（Marx-Engels-Gesamtausgabe、新『マルクス／エンゲルス全集』全114巻、1975～、既刊60巻）の編集を共同で進めていて、文男先生とも生前に深い親交があり、仙台滞在時に先生のご自宅を訪ねた折、英太郎先生の遺文庫を含む文男先生の書籍コレクションに非常に大きな関心を寄せていた。暫定目録を一読するなり、同氏からは、コレクションの内容を絶賛する次の書簡が届いた。「無条件に大学で引き取ってもらい、遺文庫として保管すべきだ」。理由は「①書籍がすべて学術書であって、プロパガンダ的なもの、スターリン主義的なものはない、②遺文庫に国際性がある（日本語以外に、英独仏露など、多数の外国語文献が含まれている）、③遺文庫が一定のテーマを持っていて、系統性がある（哲学、社会学、社会主義、労働運動史、等々）、④遺文庫に多くの稀覯書が含まれている（19、20世紀初頭に出た初版本）、⑤西洋の著名な、学者の著作を相当広範囲に網羅しているからだ」。

この評価に意を強くし、同氏に、書簡の内容を佐々木学長宛ての鑑定書（Gutachten）にまとめてもらえるように依頼した。鑑定書が届き、4月上旬に翻訳して佐々木学長に届けたところ、「①遺文庫について、何点受け入れるかは別にして、その稀少なコレクションを散逸させないように、社会として誰かが保存すべきという『公共性』の視点からまず考えていること、②尚綱学院大学の専門に『比較的』近い数人の教員の意見も聞いていること、③同時に、整理などにかかなりの費用を計上し、また将来の図書受け入れのスペースを失うことから、学校法人理事会とも意見交換を始めている」、という趣旨の鄭重な返信を頂いた。同時に前後して、阿留多伎氏や太田健児氏（尚綱学院大学教授）から、遺文庫の内容に大きな関心をもっていること、佐々木学長が受け入れに向けて設けたワーキンググループに参加してみて、遺文庫の受け入れに積極的に関わりたいという申し出を頂戴した。

よく知られているように、尚綱学院大学の開学の礎石は、学院初代校長のブゼル女史によって据えられた。宮城県古川の出身で大正デモクラシーを代表する吉野作造は、旧制第二高等学校の生徒のとき、尚綱学院のエラ・オー・パトリックホームで行われていた同女史のバイブルクラスに足繁く参加し、同女史の薫陶を受けて受洗した。文男先生のご遺族に、尚綱学院大学のこうした校史を紹介すると、英太郎先生が東大法科の学生時代に吉野の講義を受けたときのノート（Political History）が最近新たに見つかったこと、以前に発見された同種の講義ノートは既に古川の吉野作造記念館に寄贈しているが、これはその続冊であり、こちらは尚綱学院大学に寄贈して良い、と云うことであった。

文男先生が保管されていた英太郎先生の東大学生時代の講義ノートには、ほかにも、吉野の恩師に当たる小野塚喜平次や、高野岩三郎のノートがあった。高野は、近代統計学の導入者で戦後初代のNHK会長、東大経済学部、大原社会問題研究所の創設者、戦後憲法の成立にも大きな影響を与えた人物である。文男先生自身の学生時代のノートには、山田盛太郎や大河内一男、宇野弘蔵など、戦後の東大経済学部を代表する教授の講義ノートが多数あることも明らかにされ、ご遺族は、これらのノート、さらに英太郎先生の美代夫人のベルリン日誌なども同時にこの機会に寄贈することは可能、というご意向であった。

こうしたご遺族の意向をお伝えしたところ、吉野ノート寄贈の可能性に関連して、阿留多伎氏から、「ブゼル先生が伝えた聖書の言葉やアメリカの民主主義、あるいはブゼル先生の人柄が、吉野作造らに『平等』を意識するきっかけを作った」のではないかと、「吉野が学んだエラ・オー・パトリックホームをゆりが丘キャンパスに再築することになっており、エラ・オー・パトリックホームでの講義ノートの展示ができれば、吉野が100年ぶりに里帰り」したことになると、という返信を頂戴した。

一般には、英太郎先生は、マルクスの『資本論』やレーニンの『帝国主義』などに依拠して、社会政策の基礎理論と実証研究を推し進め、研究史に大きな足跡を残された研究者として知られているが、英太郎先生が、そうした方向での研究を志す大きなきっかけとなったのは、東大法科への入学直後に吉野の講義などを通して受けた大正デモクラシーの強烈な洗礼であり、吉野を創始者とする東大新人会での活動であった。尚絅学院大学での「服部英太郎・文男遺文庫」の開設に至る直接的で決定的な契機は、この阿留多伎氏の返信に記されているブゼル女史と吉野との師弟関係であり、吉野と英太郎先生との師弟関係を象徴する吉野の講義ノートが遺文庫に含まれていたことにあった。

佐々木学長、上西氏、阿留多伎氏らの文男先生ご自宅訪問を間に挟み、2009年6月上旬、学長から正式に遺文庫受け入れに関する返答があった。返答には、「尚絅学院創設者ブゼル女史のバイブルクラスで学んだ吉野作造に薫陶を受け、社会正義実現のための学問を追求した服部英太郎氏、そしてその影響を受けて、同一の軸で研究した服部文男氏が書いたノート、収集した貴重な書籍類を尚絅学院大学で受け入れる正当性がある。…したがって、一義的には、今回見つかった吉野作造のPolitical Historyは最も中心性がある資料である…」と記され、新設図書館のキャパシティや今後図書整理に要する費用などを勘案して、結論的には、吉野作造の原資料としての英太郎先生の「講義ノート (Political History)」、英太郎・文男両先生の講義ノートほかの原資料、暫定目録に整理された洋書、ISBNがついていない和書に限定して受け入れを進め、「服部英太郎・文男遺文庫」として永久保存することが唱われていた。

前後して、佐々木学長から、率直に学内予算の問題などを教えて頂いていたので、この回答はご遺族、また門下生一同にとっても、たいへんありがたかった。尚絅学院大学には、感謝してこの提案を受け入れるという返答をすることになった。シンポジウムで出席者に配布された「服部英太郎・文男遺文庫目録」は、A4判641ページからなる極めて浩瀚なもので、「登録番号」、「請求記号」、「書名」、「巻数」、等々の書誌項目が詳細に明らかにされている。大学院生諸君の作業に関わる中で、「簡易」であっても書誌目録の作成には、多大な集中力と膨大な時間を要することを目の当たりにしていたので、こうした実務作業に当たられた皆様のご尽力にはいくら感謝してもしきれない思いがした。尚絅学院大学は、この書誌目録を全国の大学・研究機関に配布し、遺文庫への研究者の自由なアクセスを可能にするという。これはまさに、

文男先生のご遺族が、また門下生が切望していた遺文庫の理想像である。

こうして英太郎先生、文男先生と学者父子2代にわたるコレクションに永久保存と公開の途が開かれた。しかしながら、開かれた途はあくまでその一部に対してであった。残る約1万5千冊の、主として文男先生ご自身が蒐集された遺文庫をどうするかが、処理を任された門下生には大きな課題となり、国内のいくつかの大学図書館に受け入れを打診したのだが、近年、どの大学も図書館の収蔵スペースの余裕がなくなり、加えて保管・管理のために必要不可欠な書籍の目録化に関する予算が逼迫しているからか、どの大学でも、お願いしたい冊数に話が及ぶと、鸚鵡返しに「謝絶」の二文字が帰ってきた。

そこで私は、ご遺族の許可を得て、韓立新氏（清華大学教授、同大人文学院哲学部副学部長・当時）に話すことにした。韓氏の勤務先、清華大学は中国屈指の大学で理系が中心。今世紀に入り、数十年間閉鎖していた文系学部や研究科を復活させて、文系分野でも中国No. 1の座を求めようとしていた。2009年9月に、私は、同大学から客員教授として最新のマルクス学に関する知見を「海外学者短期講座」で紹介することを依頼されていた。中国では現在、各大学の中心的な教授陣の大半が海外での学位取得者である。韓氏は一橋大学に約10年の留学経験をもち、この間、日本における文献実証を重視した重厚な学術的マルクス研究に強い関心をもち、中国での紹介を精力的に進めている研究者であり、北京における初期マルクス、マルクス主義哲学研究のオピニオンリーダーの一人である。留学中に韓氏は文男先生と直接面識を得ることはなかったのだが、文男先生の門下生の一人という誤解が生まれるほど、文男先生の研究や人柄に私淑していて、私の紹介で、仙台で開催された2008年3月の文男先生を忍ぶ会にも出席されていた。講座で訪中した折、私は韓氏に特に時間を取って貰って文男先生の遺文庫について次のような紹介をした。

英太郎先生から引き継いだ書籍以外で、現在手許にある文男先生の遺文庫は、①マルクス／エンゲルス、レーニン等の全集や著作集の原典、およびその日本語翻訳、②スターリン、トロツキー、ローザ・ルクセンブルク、トリアッティ、カール・コルシュ等の全集や著作集の原典及びその日本語翻訳、③日本語の社会・人文科学諸分野の講座。④日本語版個人著作集、単行書、⑤宮本百合子や小林多喜二、中野重治らの全集および文学書、⑥定期行物、⑦ロシア国立社会＝政治史アルヒーフ・モスクワ所属のオリジナルから直接作製されたレーニン『帝国主義論』自筆原稿のレプリカなどからなっている。①には1975年から配本が開始され、既に相当部分が絶版となっている Marx-Engels-Gesamtausgabe の全巻揃ほか多数の版本が、③、④には1960年代以降、今世紀にいたるまで、日本国内で刊行された数千点を超える、実に膨大なマルクス経済学、経済学史、社会思想史、哲学、経済政策、社会経済史、歴史に関する書籍が系統的に蒐集されている、⑥には日本語以外では、*Marx-Engels-Jahrbuch*, *Karl-Marx-Haus Studien Reihe*, *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, *Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung* 等、国際的に第一級のマルクス／エンゲルス、マルクス主義研究の専門誌が多数含まれ、日本語では、『経済評論』、『唯物論研究』、『学藝』、『歴史科学』、『歴史』、『国際文化』、『世界文化』、『哲学研究』、『哲学雑誌』、『理想』、『思想』、『世界』、『唯物論研究』、『唯物史観』、『思想と科学』、『潮流』、『評論』、『社会科学』、『労働経済旬報』、『現代と思想』、『科学と思想』、『季刊社会思想』、『知の考古学』、『季刊窓』、『唯物史観』、『経済学史学会年報』、『経済理論学会年報』等々の雑誌が、英太郎先生の蒐集に由来する戦前来のものから、一部欠落はあるもののほぼ全冊揃っていて、①～④の著作と合わせると、欧米からの影響を含めて、日本における

マルクス主義の研究・普及を検討する場合、この遺文庫から得ることができる情報量には計り知れないものがある。

私は文男先生ご自宅書架の100枚を超える写真をPCのモニターに呼び出して、この説明をしたのだが、韓氏は説明に写真が加わったことで、改めて大きな感銘を受けられた様子であった。韓氏の動きは素早く、早速遺文庫受け入れに関して万俊人氏（清華大学教授、人文学院哲学部長・当時）の同意を得て、同年11月には受け入れ条件の確認に関する薛芳渝清華大学図書館長との協議をセットしてくださった。11月9日、私は再び訪中し、清華大学との受け入れに関する協定書に署名することになった。協定書は次の5項からなっていた。①清華大学は9月に紹介された約1万5千冊の書籍の全てを受け入れる。②書籍は遺族からの無償寄贈とする。③遺文庫の整理と通関リストの作成のために清華大学は専門職員を派遣する。④輸送費は全て清華大学が負担する。⑤「遺文庫の寄贈を受ける清華大学は、遺文庫を『服部文男日本・東北大学名誉教授（1923～2007）遺文庫』として別置保管し、利用に供する」。

こうして、残部の行き先が確定した。その後、2010年2月に、韓氏と万氏が共に東北大学を訪問する機会があり、2人は文男先生宅を訪問、ご遺族に挨拶された。また同年4月には清華大学の牛雅利専門職員を迎えて遺文庫の整理が開始された。このときにも前回の暫定目録作成時と同様、大学院生諸君の協力を得た。メンバーは前回の3氏に加え、次の4名の留学生諸氏、陳浩氏、郭啓明氏、王珊珊氏、陳艷氏にも手伝って貰った。こうした諸兄姉の援助を得て、作業は捗り、5月の連休明けには中国に向けて発送となった。この間、文男先生の後輩で、私の元同僚である我孫子燐氏（東北大学元教授）から約3千冊の女性史関係コレクションの寄贈の申出があり、同じ便で北京に向かうことになった。文男先生の門下生に清華大学の遺文庫受け入れについて話をし、私も一定数の書籍の寄贈をすることを明らかにすると、黒滝氏、大野節夫氏（同志社大学教授）、大和田氏、渋谷正氏（鹿児島大学教授）、橋本直樹氏（同）からも多くの書籍の寄贈があり、これら各氏の書籍を含め、総計19,787冊の書籍が海峡を渡るようになった。

この約2万冊の寄贈冊子の内訳については、尚綱学院大学からも貴重な協力を頂いた。清華大学への遺文庫寄贈は、尚綱学院大学への寄贈が確定した後、独立に進められていたのだが、たまたま尚綱学院大学の図書館への寄贈本の搬入が、清華大学向けの書籍の整理時と重なっていたので、この機会に、文男先生が蒐集した和書で尚綱学院大学に収蔵される予定になっていた部分を、英太郎先生が購入したと想定される刊行時期が戦前から戦後の比較的早い時期の和書の未整理分と差し替えて頂くことになった。こうして清華大学に向かった文男先生の遺文庫を補完することができた。

清華大学は、2011年に創立百周年を迎えた。この年、新たに建設された人文図書館の最上階ワンフロアの半分近いスペースに、開架式の服部文男文庫が開設された。開所式には私も招かれて挨拶した。これに先立って、遺文庫が北京に到着した2010年7月に、韓氏から感謝状が届いた。ここでは文男先生のご遺族の決断と、私たち門下生や文庫の整理に関わった大学院生諸君への謝辞に続けて次のように述べられていた。「世界にも稀な、故服部先生の親子二代のマルクスに関する蔵書が、清華大学に寄贈され、実際に清華大学に安着されたという事実は、今後間違いなく一つの歴史的イベントとして中日両国の学術交流史に記録されるでしょう。清華大学は、中国の名門大学として日本でも知られていますが、そのマルクスに関する蔵書は、1952年の中国政府の大学調整や合併などの政策で他の大学に移され、その後、文科系の学部

ができなかったことなどからほとんど発展がありませんでした。恥ずかしい話ですが、何か外国語のマルクス関連文献を探すと、ほとんど見つからない状態でした。私自身は、清華大学に勤めてから、大学当局に対して何度も MEGA や日本マルクス主義文献の購入などを提案しましたが、その提案はなかなか受け入れられなかったのです。その理由は分からないわけではありません。いまになると、神様でもなければ、短期間に、MEGA を含むマルクスに関するアカデミックな研究文献を購入し、ほとんど漏れなく完全な専門的資料庫を作ることなど不可能だからです。…日本に留学した私、そして清華大学は、なんとその神様に恵まれたようです。2009 年から、大村先生を通して、『服部文庫』の存在を知って、またその『服部文庫』の清華大学への寄贈の可能性もあることを知って、本当に興奮しました。これで清華大学の蔵書状態を一気に改善して、この大学の名に相応しいマルクス蔵書と研究の基礎が築かれるのではないかと考えました」。

これに続けて、韓氏の感謝状は、万氏から文男先生のご自宅を訪問した際、この遺文庫を基礎に、清華大学に「マルクス主義文献研究センター」を設立してはどうか、と云う提案があり、この設立起案書を最近清華大学本部に提出したことを報せ、最後に、「留学生や清華大学の学生は、この文庫が日本に残置された場合よりも、さらにいっそう活用し、その栄養を吸収し、日中両国の友好のため、さらに世界のマルクス研究のために貢献できるよう努力すること」、「この努力こそ、服部先生の在天の霊に対して、そして服部先生のご家族、ご門下生、およびこの移転のために力を尽くす方々に対して、一番の慰めになると思います」、と決意を示されていた。

尚綱学院大学で「服部英太郎・文男遺文庫」開設のシンポジウムが開催された丁度 1 週間後、2012 年 10 月 20 日に、清華大学で、大学独自の独立した研究センターとして、韓氏が設立趣意書を起案された「清華大学マルクス主義文献研究センター」の開所式が挙行された。これにも私は出席を要請されていたが、尚綱学院のシンポジウムと全く同一の理由で欠席せざるを得なかった。日中間の交流は尖閣問題では大荒れだが、清華大学は、習近平氏の出身校でもあり、当日は政府や中国共産党要人の出席も含め、開所式は大きな成功を収め、文男先生の遺文庫に改めて大きな関心が向けられたという。

韓氏や万氏をはじめ、清華大学の関係者諸氏から、私がこの文献センターの拡充に引き続き協力をするを要請されている。本誌の読者諸兄姉もまた、尚綱学院大学の「服部英太郎・文男遺文庫」に関する研究成果の発信を、日本国内にとどめることなく、中国にも届け、日中間の学術文化交流への貢献をお願いしたい。政治や外交レベルでは日中間には暗雲が漂い、対話よりは対立が進行しようとしている時期であるだけに、それだけ余計に、数年、否、数十年先を見据えた、学術的な交流の絆を深める必要があるように思われる。そのためにも、この「二つの服部文庫」の開設が、一つの契機となることを念願してやまない。